

シャン・F・ブロックの「タイタニック伝」と短編小説

— 北アイルランドが映し出す人間世界の縮図 —

八 幡 雅 彦

Shan F. Bullock's Biography of "The Titanic Hero"
and his Short Stories : A Microcosm of the Human World
Reflected in Northern Ireland

Masahiko YAHATA

タイタニック号とトマス・アンドリュース — 北アイルランドの融和のシンボル —

1997年公開の、ジェイムズ・キャメロン監督の映画『タイタニック』は映画史上最大の興業利益を上げるとともに、アカデミー賞11部門を獲得する驚異的なヒット作となった。この映画によって、タイタニック号は世界中の人々の心の中に焼きつけられたと言っても過言ではないが、この船が北アイルランドで造られたことを知る人の数はごく僅かである。ジョン・ウィルソン・フォスター『タイタニック・コンプレックス』(1997)は、タイタニック号を題材とした文学、音楽、映画を論じることにより、この豪華客船の沈没が世界中の人々の心にかかる影響を与えたかを追究した優れた文化論である。その中で、フォスターも、「私が尋ねた北アメリカ人で、タイタニック号がベルファーストで造られたことを知っているのは皆無だった」¹⁾と述べている。タイタニック号は、ベルファーストの造船所ハーランド&ウルフで建造され、処女航海中の1912年4月14日、北大西洋にて氷山に激突して沈没し、乗客、乗組員のうち生き延びたのは約700人で、約1,500人が死亡するという大惨事となった。映画『タイタニック』も、この船がイギリスのサザンプトンから出港するシーンから始まり、ベルファース

トはいつさい描かれておらず、この映画の成功によってベルファーストがタイタニック号誕生の地として世界中の人々に認知されたとは言い難い。

しかし、この映画の公開の後、長い間絶版だった、タイタニック号と北アイルランドの関わりを述べた1冊の本が1999年に再版された。それは伝記『造船技師トマス・アンドリュース』(1912)で、著者はシャン・F・ブロック(1865-1935)である。アンドリュースは、1873年、ベルファースト近郊の町コンバーに生まれ、後に造船技師としてタイタニック号を設計し、この船の処女航海に乗船し、39歳の若さで帰らぬ人となった。シャン・F・ブロックは小説家で、本名はジョン・ウィリアム・ブロック、ファーマーナ州クロムのプロテスタントの家庭に生まれた。しかし彼はカトリック教徒に共感を示し、ペンネームを、ウィリアム・カールトン(1794-1869)の小説集『アイルランド農民の特性と物語』(1830)のうちの1編「シャン・ファダの結婚」から取った。²⁾ブロック同様にプロテスタント教徒でありながら、アイルランドのナショナリズムに共感を示した政治家ホレイス・ブランケット(1854-1932)と、ブランケットの幾人かの知人は、アンドリュースの死を悼み、彼の功績を称え、彼の伝記の出版を企てた。そしてその著者として白羽の矢が立てられたのがブロックだった。

『トマス・アンドリュース』の序文の中で、ブランケットは、ブロックに執筆を依頼した理由を次のように述べている。

シャン・ブロックはアルスター人で、アルスターの生活に関する物語を書き、その誠実さと、アルスターの人間を誰よりも理解しているという点において、アイルランド関連の書物の中では傑出している。アイルランドの他の秀れた創作作家たちは、己の気質を表現するためにアイルランドの生活を利用してきたのに対し、シャン・ブロックは、彼の偉大な文学的才能をほとんど全て、男女の集団社会としてのアルスターの実像を根気強く、ありのままに、誠実に考察することに捧げてきた…ブロック氏の考察の中で、主流を占めるのは常に「人間」という要素である。彼の作品を読んでいると、彼は人間、特にアルスターの人間の観察を殊の外好んでいるということが実感できる。⁽⁴⁾

ブランケットがここで示唆しているように、ブロックの小説は、彼の時代の北アイルランドの人間像をリアルに描き出している。その数多くは、彼が生まれ育ったファーマーナ州周辺の農民たちとその家族たちの人間像であった。しかし、ブロックはトマス・アンドリュースとは個人的面識がなく、彼の伝記を書くにあたっては、彼およびタイタニック号について残された記録、彼の手紙、家族、友人、同僚の証言に基づくしかなかった。したがって、この伝記は、ブロックが、彼の小説で、ファーマーナ州周辺の農民たちの描写において見せたようなリアルさにはやや欠けるものの、アンドリュースの「人間」としての実像を描き出そうとした最大限の努力が見受けられる。ブロックは、アンドリュースがユニオニストであったことをありのままに述べ、建設的なユニオニストであったことを次のように強調する。

一説によると、アンドリュースは帝国主義者で、平和を愛し、それゆえに無敵の海軍を支持していた。彼は確固たるユニオニストで、自治

法は、イギリスからの信頼、そして強力で裕福なパートナーとの結び付きから得られる安全保障を部分的に損ねることにより、アイルランドの財政破綻を招くと信じていた。時として、彼は、理性的な主張によってというよりはむしろ熱情に訴えることによってイギリスの有権者たちに影響を与えようとするアイルランドのユニオニストたちの政策に不賛成の意を示していたと言われている。また、彼は、動乱が取り、資本投資家たちに安全の保証が提供されない限り、アイルランドは決して幸福で裕福にはならないと感じていた。⁽⁴⁾

タイタニック号のような豪華客船を設計した彼の偉業、そしてタイタニック号沈没時の、自分の命を投げうって、ひとりでも多く乗船客たちの命を救おうとした彼の英雄的行為を振り返った時、アンドリュースは、建設的ユニオニストとして、アイルランドの平和と繁栄を心から願った人物であったと言えないだろうか。彼のタイタニック号設計の偉業には、狂信的ナショナリストであった小説家アースキン・チルダース（1870-1922）でさえも次のような賛辞を送ったことをブロックは紹介している。

「アンドリュースの近くにいると元気づけられた」とチルダース氏は述懐し、そして続ける。「彼の心は、偉大な科学のディーテイル（細部）並びにそのアンサンブル（合唱体）、技術的側面並びに人間的側面に精通し、生き生きと踊っているようだった。そしてその一方で絶えず、科学の限界を広げ、新たな問題を克服し、新たな完成を達成しようと努力していた。スクリーンの回転に関することであれ、船のデザイン、速度、商業的競争といった高度な問題に関することであれ、同様の取り組みと情熱を示し、そして何よりも、飾らず自己を見せることに同様の喜びを感じていた」⁽⁵⁾

チルダースのアンドリュースに対するこの賛辞の中には、北アイルランドのプロテスタント・ユニオニストとカトリック・ナショナリス

トの融和に対するアンドリュースの願いがメタフォリカルに示されていると言えないだろうか。アンドリュースは、タイタニック号の工業的、商業的成功を通して、この両派が「合唱体」となって、「限界」、すなわち対立を乗り越え、様々な問題を克服し、融和という「完成」に到達することを心から願ったのではないだろうか。しかし残念ながらタイタニック号はその処女航海において沈没し、アンドリュースも若い命を失った。彼が己の命を投げうって、人種、宗教、分け隔てなくひとりでも多くの乗船客たちの命を救おうとした行為もまた、北アイルランドの人々の融和に対する願いの現れとも言えないだろうか。彼のこの英雄的行為に関するブロックの描写は胸を打つ。長くなるが、ここに引用したい。

アンドリュースは、陰鬱な調査を終えて上がって来た時、スローン客室乗務員に出会い、事故が起きたので、乗船客を、念のために、暖かい衣服と救命浮を身につけて救命ボート甲板に集めるよう告げた。しかし彼女は彼の顔に、「あたかも心が引き裂かれている様相」を読み取り、重大な事故ではないのですかと尋ねた。彼は、非常に重大な事故だと答え、そしてパニックを恐れて、この悪いニュースは口外しないようにと彼女に命じ、警告と救助の作業へと向かって急いだ。

別の客室乗務員は、アンドリュースが、頭には何もかぶらず、凍てつく寒さの中、案内係たちに、乗船客を全員起こして救命ボートまで誘導するよう、静かに命じて回っていたと述懐している。

彼が上甲板でスミス船長に、「3隻はもうすでに出ました」と言っているのを聞いて、この客室乗務員は下の階段まで駆け降りると、驚いたことに、水が彼女の足から六歩以内のところまで迫っているのを見た。そこですぐに彼女は助けを求めて、駆け上がって戻ると、アンドリュースに出会った。彼は彼女に、乗船客たちに上甲板を離れるよう警告せよと告げた。

10分が過ぎた。水はさらに階段の上まで来

ていた。再びアンドリュースが彼女のところに来て、言った。「乗船客たちに暖かい衣服を身につけるように言いなさい。全員が救命浮をつけていることを確認して、彼らを全員救命ボート甲板に上げなさい」

さらに15分が過ぎた。階段の一番上までほとんど浸水していた。もう一度アンドリュースがやって来た。「使っていない客室も全部開けなさい」彼は命令した。「すべての救命浮と余った毛布を取り出して、乗船客たちに配りなさい」

命令通りのことが行われた。案内係と乗船客たちは救命ボート甲板に上がった。しかし、客室乗務員は、もっと多くの救命浮を取りに戻った時、再びアンドリュースに会った。彼は彼女に、女性たちは全員客室を離れたかと尋ねた。彼女は、「はい、しかし確認して参ります」と答えた。

「もう一度見回って来なさい」と彼は言って、そして続けた。「君も救命浮をつけるよう、私は言わなかったかね。間違いなくつけているだろうな」

彼女は答えた。「はい。私は卑怯だと思いましたが」

「そんなこと、気にしなくていい」彼は言った。「君は自分の命が尊いのだったら、コートと救命浮を身につけて、それから甲板を回って、乗船客たちの目の届くところになさい」

「そう言い残して彼は去りました」この客室乗務員は述懐している。「そしてそれが、私が真の英雄と見なす、彼の国が誇るに足る人物の最後の姿でした」

.....

悲劇的結末のおよそ20分前、最後の遭難信号が放たれたが効を証すことはなく、上甲板も前部甲板も海に呑み込まれ、残り少ない救命ボートが下ろされた場所の近くでは衝突といくつかの混乱があり、女性と子供たちは怯んで、乗ることを尻込みし、彼女たちの夫といっしょに残りたがる者もいた。多分、寒さと恐怖で身動きできない者もいたことだろう。そこへアンドリュースがやって来て、両腕を振り回しながら、

大声で命令した。

「女性はすぐに乗って下さい。一刻たりとも無駄にはできません。救命ボートを選んでいる暇などありません。躊躇しないで、とにかく乗って下さい！」

彼女たちは彼の命令に従った。彼女たちは今日、ひとりでも、他の多くの乗船客たち同様、自分たちの命があるのはアンドリュースのおかげだということを知っているだろうか。

この場面から少し離れたところで、スローン客室乗務員は静かに待ちながら、アンドリュースの最後の姿を見た。彼女自身は船を離れたとは思わなかった。というのは彼女の友人たちはすべて船に残り、彼女だけが救命ボートに乗るのは卑怯だと思ったからである。しかし、アンドリュースの命令が — 彼女は彼のこの堂々たる振る舞いを2時間余り見続けていた — 力強く下された。「躊躇するな！一刻たりとも無駄にしてはだめだ。早く乗れ！」それゆえ彼女は最後の救命ボートに乗り、救われた。

2時5分。タイタニックの命もあと15分だった。

なされるべきことはすべてなされ、残された時間はあと僅かだった。船首も水に浸かっていた。美しい星の下、非常に穏やかな海面のあちこちに救命ボートは浮いていた。何艘かはタイタニック号のすぐ近くに、何艘かは1マイルあるいはそれ以上離れたところに浮いていた。ボートに乗ったほとんどの人々の目は沈没して行く船に向けられていた。そして、恐ろしい傾斜をなして、未だに行列一列光を放っている左舷のライトが、暗闇の中にゆっくりと消えて行くのを見ていた。

.....

ある生存者はアンドリュースが、頭には何もかぶらず、救命浮を持って、船長のいるブリッジへ、恐らくは別れを告げるために向かっていたのに出会った。

その後、ひとりの旅客係補佐は、アンドリュースが喫煙室にひとりたずみ、救命浮は彼の近くのテーブルに置いたままで、胸のところで腕を組んでいるのを目撃している。その旅客係

は、「アンドリュースさん、あなたは救命浮をつけないのですか」と尋ねた。

彼は一言も答えず、ただぼんやりと立ったまま、微動だにしないままだった。

彼はそこにひとりうっとりとして佇んで、何をしていたのだろうか。アンドリュースと、彼について残された記録を知るわれわれは、彼の目の前には、故郷と、そこに住むすべての愛する人々、妻、子供、父、母、兄弟、妹、親戚、友人たちの姿が浮かんでいたと信ずる。彼らの姿は、その時その場所で、アンドリュースにとっては何を意味したのだろうか。そして、恐らくは、束の間、それらの姿の後ろに、彼の人生と彼の船に終止符を打とうとしているこの恐ろしい悲劇をとっさに確信したことだろう。

しかし、この静かで、孤独な、僅かの時間にアンドリュースが見たものが何であれ、それが彼をその場所に引き留めることも、彼の男らしさを失わせることもなかった。仕事、仕事 — 彼は悲惨な結末まで働き続かねばならなかった。

幾人かの生存者は、アンドリュースが、主任技師のベルとアーチャー・フロースト、そしてその他の英雄たちといっしょにエンジンルームにいるのを最後に目撃している。彼らは皆、雄々しく、ライトを照らし続けポンプを作動し続けるために渾身の力を注いでいた。

別の生存者は、アンドリュースが — それは彼の、最後の、もっとも偉大な光景だった — 悲劇的結末の数分前、救命ボート甲板から、海に放り出されてもがいている不運な人々に向けてデッキチェアを投げているのを目撃している。

そして、ゆっくりと、長く傾いて沈みながら、タイタニック号は消え、その短い命と、トマス・アンドリュースの命を海に捧げた。

かくしてこの崇高な人物は逝った。彼が、その建造に貢献したこの偉大な船の中で安らかに眠っていることを — 事実、彼はそこで眠ることを誇りに思っているかもしれない — われわれは祈りたい。⁽⁶⁾

このアンドリュースの最期に関するブロックの迫真の描写は、映画『タイタニック』において、ヴィクター・ガーバーが演じた、人命救助に奔走するアンドリュースを彷彿とさせるものがある。映画同様に優れた描写と言えよう。ブロックはアンドリュースとは面識がなく、彼およびタイタニック号について残された記録、彼の手紙、家族、友人、同僚たちの証言のみに基づいて彼の伝記を書いた。それでいて、ブロックの描写からは、アンドリュースの最期が読者の目の前にリアルに展開し、人間アンドリュースの実像が伝わってくる。したがってこの伝記は、人間としてのアンドリュースの実像を後世に残したかったというホレイス・プランケットの期待にも十分に応えた佳作と言えよう。

映画『タイタニック』の主人公は、レオナード・ディカプリオが演ずるジャックと、ケイト・ウィンスレットが演ずるローズというふたりの身分違いの恋人同士である。映画の中では、沈没の悲劇の後、夢のシーンが登場し、その中でジャックとローズが結婚し、ふたりは腕を組んでパーティー会場に現れ、他の乗船客、乗組員たちから祝福される。アンドリュースもまたにこやかにふたりに拍手を送っている。アンドリュースの願いは、タイタニック号の工業的、商業的成功を通じて、北アイルランドの人々が豊かになり、そして階級、宗派の違いを越えて、腕を組んで、融和することであったに違いない。ブロックの書いた伝記もそのことを十分に伝えているといえよう。ジョン・ウィルソン・フォスターは『タイタニック・コンプレックス』の結びで、ブロックの伝記の中から、ナショナリストであったアースキン・チルダースの、ユニオニストであったアンドリュースに対する前述の賛辞を引用し、「アンドリュースは、アイルランドでは、前にも後にも類いを見ない、賞賛に値する現代性を具現した人物⁽⁷⁾であったと述べ、アンドリュースがユニオニストとナショナリストの融和の実現に努めた人物であったことを示唆している。

次に、ブロックが、彼の小説において、彼の生まれ故郷ファーマーナ州周辺の人間たちに関し

て見せた描写を分析することにより、彼の小説がいかなる普遍的価値を持つものであるかを示したい。

『新兵たち』(1893)と『雑踏の輪』(1896)におけるブロックの人間描写

— ジョージ・ギッシングとの比較において —

ブロックが賞賛した小説家に、彼と同時代のイギリス人作家ジョージ・ロバート・ギッシング(1857-1903)がいる。ブロックとギッシングの関連については、ロバート・セリグが『ギッシング・ジャーナル』1992年11月号、1994年1月号、同年4月号の中で明らかにしている。⁽⁸⁾ ブロックはアメリカの新聞『シカゴ・イブニング・ポスト』のロンドン芸文通信員を務め、1903年から10年間に亘って同紙上にてギッシングをアメリカの読者たちに紹介し続けていた。

ギッシングは、イングランド北部の町ウェイクフィールドの中流階級の家庭に生まれ、オウエンズ・カレッジ、今日のマンチェスター大学に学んだ。奨学金を得て学ぶ優秀な学生であったが、学究生活のストレスを紛らすためか、あるいはドンキホーテの正義感からか、理由は定かではないが、娼婦マリアヌ・ヘレン・ハリソンと恋仲に陥り、彼女に金を貢ぐために大学のロッカールームで盗みを働き逮捕され、大学を放校処分となった。その後、単身アメリカに渡り、教師を務めるかたわら、いくつかの新聞に短編小説を発表し、食うや食わずやの生活を送った。帰国後、娼婦ヘレンと再会し、彼女と結婚、ロンドンに住み、小説を書き続け、相変わらずの窮乏生活を送った。当時のイギリスは、ヴィクトリア王朝の栄華を謳歌していたものの、貧富の差は増大し、ギッシングの目は絶えず社会的弱者に対して向けられていた。彼はヘレンの更生に尽力したが、その努力は報われず、その凄まじい挫折の体験は、デビュー作長編小説『暁の労働者』(1880)に生々しく描かれている。第二作目の『無階級の人間たち』(1884)は、逆に娼婦が己を更生させ社会改

革に立ち上がるという、ある意味ではギッシングのファンタジーを描いた作品である。以後、ギッシングの多くの作品は、若き知識階級の主人公たちが社会改革の志に燃え行動を起こすが、資力のなさ、労働者階級の人間たちとの意識の乖離ゆえに挫折する様を描いている。『ディーモス』(1886)、『サーザ』(1887)、『人生の朝』(1888)、『地獄の世界』(1889)、『エグザイルに生まれて』(1892)等がそうである。また、『新三文文士街』(1891)は、ギッシング自身の小説家としての苦悩と窮乏生活を彷彿とさせる。『余計者の女たち』(1893)は、父権制社会の中で生きる女性たちの自立をテーマとした作品で、1970年前後からのフェミニズム運動の隆盛に伴って、アメリカの大学では「女性学」の講義のテキストとして用いられるようになった。⁹⁾ 日本で最も良く読まれているギッシングの作品は、自伝風小説『ヘンリー・ライクロフトの私記』(1903)で、ギッシングが苦悶の人生から悟りを開いた、人生の哲学書とでも言うべき作品である。

ブロックは、ギッシングの小説の優れたリアリズムについて、「彼の物語のリアルさは、ロンドンの霧のリアルさ同様、疑う余地がない。読者は、彼の描く貧民街に常に身震いし、喜びのない家庭にゾツとする。そして彼が描く男性、女性たちは、読者がいついかなる場所でも、行動範囲の中で出会うことができる人間たちである…彼の作品は、明らかに、全ての文学愛好家によって研究される価値がある。そして、まちがいないと思うのは、彼の作品は、特定の階層のロンドンの生活を描いたものとして永遠不滅の価値を有するということだ」¹⁰⁾と述べ、称賛している。ギッシングの小説のリアリズム同様、ブロックの小説のリアリズムも称賛されるべきものがある。確かにギッシングの小説は、特定の階層のロンドンの生活、すなわち19世紀後半のロンドンの貧しい知識階級及び労働者階級の生活を描いて、当時のイギリスの社会史料として永遠不滅の価値を有するものである。同じようにブロックの小説も、19世紀後半から20世紀初頭にかけて北アイルランド・ファーマーナ

州周辺に住む人々を描いて、当時の北アイルランドの生活、宗派对立の実態を伝える社会史料として永続的な価値を有しているといえよう。そしてギッシングの小説が文学愛好家たちによって研究される価値があるものだとすれば、ブロックの小説もまた、北アイルランド問題に関心を持つ人々のみならず、多くの文学愛好家によって読まれるべき価値があると言えよう。

ブロックも、ギッシングが『ヘンリー・ライクロフトの私記』を書いたのと同様に、自伝風小説『60年後』(1931)を晩年に著した。その中で彼は、自分と同じプロテスタント教徒たちよりも、むしろカトリック教徒たちに共鳴を覚えたことを次のように述べている。

彼らの方が生き生きとしていて、素朴で、愛すべき人間たちだった。さほど世俗的でなく、強引でなく、独自のユーモアのセンスと親切さを兼ね備えていた。彼らは数多くの物語を知っており、それらを見事に語った。ものごとはあまり知らなかったが、偉大な昔の知恵を持っており、非常に貧乏だったが、どこか豊かだった。たぶん、ひとこと言えば、彼らは生粋のアイルランド人だったので、人を魅惑したのだろう。¹¹⁾

ブロックのデビュー作の小説集『新兵たち』(1893)のうちには四つの作品が収められている。表題作「新兵たち」の中で、ブロックは、カトリック、プロテスタントの過激派軍事組織の戦いを描いているが、確かにカトリック軍の描写の方がかなり生き生きとしている。しかし、『60年後』のうちで、ブロックは、カトリック教徒たちに共鳴を覚えていたとはいえ、自分自身のことを、「ふたつの門番小屋の間の世界の哀れな子供」¹²⁾と呼んでいる。彼の父親は、イギリス出身のアーン伯爵がファーマーナ州クロムに所有する土地の管理人であった。そこには馬の放牧場があり、その中にふたつの門番小屋があった。ひとつはイギリス人たちが管理していた、もうひとつにはアイルランド人たちが管理していた。これは、ジョン・ウィルソン・フォスターも指摘しているように、ブロックは、彼

自身のことを、イギリスとアイルランド、プロテスタントとカトリックの狭間で苦しむ哀れな人間とみなしていたということなのだろう。⁽¹³⁾かくしてブロックは、プロテスタント、カトリックの宗派紛争を、どちらに与することなく、中立的な視点から描いた。

上述の「新兵たち」の意図は、双方の過激派軍事組織を批判することであった。「新兵たち」の原題は“Awkward Squads”であるが、文字通りには「未熟な連中」という意味である。ブロックは、彼らをこの上なく未熟で臆病な兵士たちに仕立てて、戯画化して描いている。作品の中で、カトリック側はフェニアン兵、プロテスタント側はオレンジ兵と呼ばれている。ある時、フェニアン兵たちが廃墟と化した城で軍事訓練を行っている時、オレンジ兵たちが城に近づいて来るのに気づいた。彼らは城壁の背後のツタをよじ登って隠れ、オレンジ兵が中に入るのを許した。その時、幾人かのフェニアン兵が足を滑らせて地面に落ち、「ドサッ」と大きな音を立てた。この音に驚いて、双方ともいちもくさんに逃げ出した。しかし、ついに彼らは戦わねばならぬ日が来た。彼らの武器は凶器ではなく、フェニアン兵たちの武器は太いこん棒で、オレンジ兵たちの武器は銃の台尻とベルトの留め金だった。ブロックは、彼らの戦闘をこの上なく滑稽に、痛烈な皮肉を込めて描写する。

「来やがれ！来やがれ、悪魔ども！」テリーは叫んだ。「アイルランドよ、永遠なれ。ウィリアム王などぶっ殺せ！」

「くたばれ、反逆者ども！」残りのゴーティーンの住民たちはどなり返した。「ローマ法王など地獄へ落ちたまえ！」

かくして道のあちこちで、森の中で、空き野原で戦闘は続いた。とうとう彼らはへとへとになり、暗闇が落ち、残りの敵対する兵士たちも散って行った。

それは、アイルランド古来の伝統にふさわしい、堂々と戦われた、不屈の精神で続けられた壮麗な戦闘であった。アイルランド人は今でも、少々の困難は、社会的なものであれ、政治的な

ものであれ、彼ら自身の右腕の力で解決できることを十分に証明した戦闘であった。

新兵たちが、これ以上くだらぬ大義名分で戦うことがなきように！⁽¹⁴⁾

ここでブロックは、カトリック・ナショナリスト対プロテスタント・ユニオニストの対立というアイルランドではもっとも大きな問題を、「少々の困難」、「くだらぬ大義名分」と蔑視している。そしてまた、凶器の代わりに、こん棒、銃の台尻、ベルトの留め金を武器に用いた彼らの戦闘に関して、「彼ら自身の右腕の力で」と述べている。この原文は“by force of their own right arms”だが、ここでは「彼ら自身の正しい武器の力で」という意味を掛け、両者の対立を二重の意味で戯画化して笑い飛ばしているように思われる。ここではまた、彼自身を「ふたつの門番小屋の間の世界の哀れな子供」と見なすブロックが、カトリック・ナショナリストとプロテスタント・ユニオニストに対して、「無益な戦いは止めろ」というメッセージを発し、両者の融和を祈念しているようにも思われる。

一方、同じ小説集に収められた「国家公務員」は、両者の対立をよりシリアスに、客観的に描いた作品で、同時に、北アイルランドのみならず、人間世界一般に通じる普遍性を持った作品で、文学的価値も高く、ブロックの代表作として『フィールド・アイルランド著述選集』(1991)のうちに収められている⁽¹⁵⁾。舞台は1870年頃のキャバン州の架空の村ラヒーーンで、村民の大半はカトリック教徒だった。この村にイギリスの国営郵便局の支局があり、ダンという年老いた男性職員ひとりが勤務していた。彼は靴直し職人でもあった。ライリーという未亡人がプロテスタント地主に農場を借りていたが、地代を支払えなくなり、立ち退きに会った。その後、プロテスタント教徒で、体の不自由な老人と、彼の家族がその農場に住んだ。作品には、村民たちがカトリックで、老人がプロテスタントであることは明記されておらず、

前半部分で読者にそれを匂わし、後半部分でそれを確信させるストーリー展開である。カトリックの村民たちは、このプロテスタント老人と彼の家族との一切の係わりを拒絶する。それは、同時期、メイヨー州で、イギリス人貴族の土地代理人を務めていたヒュー・カニンガム・ボイコット大尉（1832-1897）に対して地元のカトリック住民たちが排斥行為を加え、後に“boycott”という英語の語源にもなった史実を彷彿とさせる。しかし、ダンはこの老人との付き合いを続ける。ある時、ひとりの村民がダンの郵便局にやって来て、「あいつとは二度と付き合うな」と警告するが、ダンは、「正義だと！…おまえは、ひとりの男に何の食い物も与えない、何の着る物も与えない、誰と話すのも許さないことを正義と呼ぶのか！小さな子供たちを飢えさせ、女房を怒らすことを正義と呼ぶのか」⁽¹⁶⁾と怒鳴り返す。かくして村民たちはダンに対してもボイコット行為を加える。大人たちはダンを避け、子供たちに郵便物を取りにやらせるが、ダンと口を聞くことは一切許さない。そして靴直しの注文も途絶える。今やダンが会話できるのは、同じようにボイコットにあっているプロテスタント老人のみとなり、ある時彼を訪れる。そこで老人の次の言葉が、彼がプロテスタント教徒であることをほのめかしている。

おまえさん、教えてくれ。ほ、ほんとうか、グラッドストーンの奴がアイルランド国教会を公式宗教でなくしたって。ああ、ああ、悪党めが！⁽¹⁷⁾

当時のイギリス首相ウィリアム・グラッドストーン（1809-1898）は、1867年のフェニアン蜂起を機に、アイルランド問題を解決するために、アイルランドにおけるいくつかの制度改革に乗り出した。その手初めに行ったのが宗教制度改革であった。当時はプロテスタント系のイギリス国教会がイギリスの公式宗教で、全土がイギリスの植民地支配下にあったアイルランドでは、それがアイルランド国教会という名

で公式宗教とされていた。1869年、グラッドストーンはその制度を廃止し、アイルランド国教会を他の宗教と同じ自立宗教団体とした。この改革は、イギリスとアイルランドの連合の根幹を揺るがすもので、プロテスタント保守派からの反対に会った。したがって、このグラッドストーン非難から、この老人がプロテスタント教徒であることが分かる。ついに極限状態の孤独に耐え切れなくなったダンは、他の村民の家に侵入し、正義とは何か、そのような正義に固執する人間は何者かといったことを叫ぶ。それが一度ならず、二度、三度と続き、村民たちの許容限度を越えた。そしてある日、ダンが自宅の台所でロウソクの明かりで本を読んでいるところへ、顔を黒く塗った男たちが銃を持って現れ、彼を取り囲んで銃口を向けて脅し、そのうちのひとりが屋根に向けて銃を撃ち放った。ダンはショックで心臓を痛め、寝込み、翌朝から別の郵便局員が勤め始め、この物語は終わる。『フィールドデイ・アイルランド著述選集』の編集者のひとりで、この作品を解説しているオーガスティン・マーティンは、ブロックのダンの描写について、「同族人たちの報復に直面しても、博愛と独立の精神を保とうとする、ひとりの人間的で勇敢なアルスター人の描写は、人間一般の体験にとっても不思議なほど真実味があるばかりでなく、不幸なことに、この物語が書かれてから百年後にこの土地にのしかかっている悲劇を予言している」⁽¹⁸⁾と述べている。マーティンの指摘するように、これは、今日まで続く北アイルランドの宗派对立の根深さをえぐり出すと同時に、このような排斥、差別は世界中のどの人間社会にも見られることを示した、普遍的価値を持った作品と言えよう。これが「人間」を描いた普遍的価値を持つ作品になり得たのは、ダンが極限状態に追い込まれて暴発するに至るまでの、彼の心の動きに焦点が定められているからであろう。そして、「博愛と独立の精神を保とうとする」ダンの苦悩をより鮮明に際立たせるために、ダンの愛読書であるシェイクスピアの『ハムレット』、『オセロ』、『リア王』、『マクベス』からの引用が随所に効果的

に挿入されているからであろう。例えば、「プロテスタントの老人との係わりを止めよ」というある村民の警告に対して彼が激怒する場面の描写がそうである。

「わしは、正しいことをしようとする時に、おまえからも誰からも忠告を受けるつもりなど毛頭ない。それが正義じゃと。そんなのは地獄の迫害じゃ！あの男が、あいつの子供たちが、一体誰に危害を与えたというのじゃ。あの男は、おまえが間違っていると思っていることをやっただけじゃ。それに、ミッキー・フリン、おまえは、他人を評価するとは、一体何様のつもりじゃ。ミッキー、わしはあの男が誰かに危害を与えたなどとは思っておらん。正義であろうとあるまいと、わしはそのように思っておる」ダンがかがんで、彼の手を閉じた本の上に置いた。「ミッキー、わしが忠告を受けるのはこの本からじゃ。よいか、読むぞ」彼は、警告の意味で指を振りかざして、ミッキーを指した。「何よりも肝心なこと、それは己に対して忠実であれ。そうすれば……」⁽¹⁹⁾

最後の部分は、『ハムレット』第1幕第3場56行から57行における、ポロニウスのレアティーズに対する忠告で、この後、「そうすれば、夜が昼に続くごとく、そなたは誰に対しても忠実であらざるを得ない」と続く有名な節の出だしである。また、上述のシェイクスピアの4作品はいずれも悲劇であり、ダンの価値観と苦悩を代弁するための、これらの作品からの引用は、彼の悲劇的結末を暗示するうえでも効果的であるといえよう。

ブロックは、北アイルランドの宗派対立ばかりでなく、そこに暮らす人々の人生の悲哀も描いた。短編集『雑踏の輪』(1896)は、前述のジョージ・ギッシングの短編集『人間の寄せ集め』(1898)、『蜘蛛の巣の家』(1906)、『環境の犠牲者』(1927)を想起させる⁽²⁰⁾。

『人間の寄せ集め』には、裕福な者、貧しい者、若者、年老いた者、その他様々な人間が登場し、

悲哀に満ちた人生ドラマを演じる。「判事と悪漢」は、裕福な判事と、彼の昔の友人で、その日暮らしの、職を転々とする男の再会の物語である。男は暴行罪で訴えられ、裁きを受けるため裁判所へ連行される。この男の裁判を担当した判事は、男がかつて自分と親しくしていた級友であったことを知り、無罪釈放し、自宅へ招く。判事は裕福だが、妻の尻に敷かれ、欲求不満の日々を送っていた。一方、男は、外国航路の貨物船の上で、その日暮らしの仕事をし、貧乏だが満ち足りた日々を送っていた。判事は、男の話に興奮し、彼が次に乗る予定の貨物船で外国へ逃避行することを決意する。しかし、かねてより病気がちだった判事は、決行前夜、興奮で頭に血が上り、死んでしまう。翌朝、男は、港で待ちぼうけを食わされながら、判事は結局恐妻から逃げることができなかったのだと思い込み、捨てゼリフを吐く。

「詩人のかばん」は、文学に志を抱いてロンドンに上京して来た青年が、ある娘と出会い、数奇な運命をたどって再会し、別れるまでを描く。青年は、詩の原稿を入れたかばんを持って、出版社回りをするために、ロンドンの安宿に投宿した。そこで娘と出会い、彼女を宿屋の主人の子供と勘違いし、かばんを預けて街に出る。実は娘も宿泊客で、放蕩を繰り返して金に窮しており、青年がいなくなった隙に、かばんを持ち、宿から逃げる。青年は後に小説家として名を成し、娘に持ち逃げされた、詩の入ったかばんのことはとうに忘れていた。ある時、彼の愛読者だと名乗る一女性が、例の詩の原稿を、盗んだ娘から預かったと言って、彼の元に返しに来た。この女性が言うには、娘は、かばんの中に金目のものを期待したが何もなくて、詩を見つけ、そしてそれを読んだところ、心打たれる感動を覚え、改心した。しかし娘は病気で亡くなり、死に瀕した娘から、詩の原稿を彼の元に返して欲しいと託されて、彼の元にやって来たと言う。彼は、この女性が彼のかばんを盗んだ娘であることに気づいたが、お互いにそのことは口には出さず、別れる。

「老いた女中の勝利」は、28歳から30年間、

女中として働き続けて来たハーストという一女性の物語。彼女はかなりの低賃金で働き続けてきた。現在彼女を雇っているフレッチャー夫妻は、家庭の経済事情のため、彼女を解雇せざるを得なくなった。夫妻は、ハーストには次の働き口はないだろうと同情し、退職金を上乘せする。職を失ったハーストは落胆すると思いきや、今までにこつこつと貯蓄してきた金と退職金とでこれからは独立した人生が送れることを喜ぶ。「流行遅れ」は、不遇な家庭を支える堅気な主婦の物語。夫は二度に亙って職を解雇され、その都度、みすばらしい家に引っ越さざるを得なかった。しかし、妻は、常に明るさを失うことなく夫を支え、子供たちを育てた。子供たちは立派に成人し、母親に感謝する。「流行遅れ」とは、流行からは程遠く、決して表舞台に出ることはなく、しかし裏でしっかりと家庭を支えるこの主婦のことを指している。

この『人間の寄せ集め』に取められた諸作品が示すのは、人間の人生は悲哀に満ちており、良くも悪くも、決して自分の思い通りにはならないという事実だ。ギッシング自身が、悲哀に満ちた、苦難の人生を送ってきただけに、彼の書いたこれらの作品は説得力を持って読者の心に訴える。ギッシングに共鳴を覚えたブロックもまた、『雑踏の輪』の中で、悲哀に満ちた数々の人間ドラマを描いている。ロバート・セリグは、そのうちの一遍「海外移民」を、ブロックの短編小説のうちでもっとも優れた作品のうちのひとつであると述べ、そのアイルランド方言による会話とアイルランド的背景にもかかわらず、ギッシングの『人間の寄せ集め』のうちに登場してもおかしくない作品だと指摘している。⁽²¹⁾ アルスター地方のグランという小さな町の駅。メアリーというひとりの若い女性がアメリカへ移住するために、汽車に乗って、アメリカ行きの船の出る港に向けて旅立とうとしていた。彼女の両親、兄弟を初めとする人々が見送りに来て涙の別れを交わした。しかし、たまたまこの日は町の市と重なり、車掌も市に行っているせいか、列車はなかなか出発しようしない。そんな時、メアリーは列車の窓から葬

儀の行進を目にした。柩は6人の男性によって運ばれており、参列者はひとりもなく、柩の上には一束の野の花が置かれているだけだった。メアリーはその寂しく惨めな葬儀の光景に胸を痛めて泣き、彼女の父と母が死んだ時のことを思うと悲痛な気持ちになり、アメリカ行きを躊躇する。さらに、メアリーはそこで、彼女のかつての恋人だったジェームズという男性に偶然出会う。彼もグランの市に行っていたという。彼は放蕩者、怠け者で、メアリーは彼に幻滅し、別れたのだった。しかし、こんな日は何もすることがないというジェームズはメアリーと同じ列車に乗り、その中でふたりは再び昔の寄りを戻すのだった。そしてメアリーはアメリカ行きの決意を翻し、彼との結婚を決意する。彼は、「神が自分をグランの市に遣わした」と意気高々に語る。メアリーは、この物語の語り手である「私」から、結婚プレゼントに、ハーブの形をした銀のブローチを贈られ、物語はハッピーエンドで終わるかに思われる。しかし、人生は思い通りにはいかないという、どんでん返しの結末が訪れる。ジェームズは大酒を飲み、駅のホームで酔い潰れる。メアリーは、泣きながら、「この人が堅実な人でさえあってくれたら良かったのに」という言葉を残して、最終的にアメリカ行きを決意する。「私」がメアリーに贈ったハーブのブローチの意味合いは一転し、故郷アイルランドを彼女の胸に刻んでおくための別れの記念品となる。

『雑踏の輪』の中から、もうひとつギッシングの『人間の寄せ集め』に加えられてもおかしくない作品を挙げるとすれば、「彼らふたり」だろう。⁽²²⁾ これは、一見、傲慢な男マーティン・ハインズと、裕福な農民の娘であるジェイン・ファロンの結婚に関する物語である。マーティンは借金をかかえており、ジェインの父親に高額の手参金を要求する。ジェインは、マーティンが彼女の父親と手参金のことで言い争い、彼女のことを「あの子牛のような娘」(“the heifer”)と呼び捨てにしているのを耳にしてショックを受け、婚約の解消を決意する。彼女はその決意を彼女の家族とマーティンに告

げるが、誰ひとりとして聞き入れない。結婚の日が近づくにつれて、ジェインは暗く惨めになる。そして、式当日、彼女は式場に現れることを拒否し、作業服を着て庭の草取りをする。彼女の家族、招待客、そしてマーティンが彼女のところに慌ててやって来る。修羅場の結末かと思いきや、またしても話は意外な方向に進展する。マーティンはジェインの手を取り、「俺の顔を見て、真実を言え。この場で、皆の前で、おまえは俺と結婚しないと見え」⁽²³⁾と怒鳴りつける。彼女は、彼の男らしさに打たれ、そして彼がいかにハンサムかに気づき、決意を翻して彼と結婚する。

『雑踏の輪』の中のもうひとつの作品「嘆く者たち」は、ギッシングの『環境の犠牲者』、あるいは『蜘蛛の巣の家』の中に加えられべき作品かもしれない。⁽²⁴⁾これは、アルスター地方の小さな市場町に住むティム、ナンという老夫婦の物語である。彼らの息子はアメリカへ移住して、シカゴに住んでいた。老夫婦は何週間も働いて数ポンドのバターを作り、市場で売り、僅かな金を得た。その中から夫のティムは6ペンスを自分の小遣いにした。彼はそれで、タバコと新聞と靴ひもを買い、ビールを一杯飲もうと思った。彼が、新聞は諦めてビールをもう一杯余分に飲もうかどうしようかと迷っている時に、近所の住人が彼のところにやって来て、郵便局に彼宛ての手紙が届いているので取りに行くようにと教えた。彼はその手紙を受け取り、シカゴの消印を見て、それが息子のパディーからの手紙だと信じて疑わなかった。老夫婦が2年前に息子から手紙をもらった時には、成功した実業家としての彼の写真と、送金為替が同封されてあった。しかし、彼らが期待して封を切ると、今回の手紙は、パディーの親友からのもので、彼がチフスで死んだことを告げていた。息子の死を知るや、ナンは買い物を止め、ティムは6ペンスを彼女に返した。この老夫婦及び彼らの息子は、当時の貧しいアイルランドの「環境の犠牲者」と見えよう。また、この作品は、ギッシングの『蜘蛛の巣の家』のうちの一遍「クリストファソン」を想起させる。やは

りロンドンに住む老夫婦の物語で、クリストファソンは夫の名前である。彼はマニアックな書物蒐集家で、仕事もせず、妻を働かせて、彼女の僅かな稼ぎの中から本を買い続けていた。彼らの住むアパートの一室は、本で埋め尽くされ、かび臭い匂いが充満していた。妻は文句ひとつ言わなかったが、間もなく病気になった。そこで夫婦はロンドンを去り、空気の良い田舎に転居することに決めた。しかし、借家の主はクリストファソンの莫大な数の本を見て嫌悪をあらわにし、彼らに家を貸すことを拒否した。妻の体調はますます悪化し、クリストファソンは初めて自分の非に気がつき、本を次々と窓から投げ捨てた。しかし、家主は、本を持って来ないのならという条件で、彼らに家を貸すことに同意する。彼らは喜び、妻の体調は回復に向かう。そこでクリストファソンは妻に内緒で本を売り払い、一箱分だけ本を持って田舎に越すことを決意する。

ロバート・セリグは、ブロックとギッシングの小説の類似性について、両者とも「敗北」と「欲求不満」を強調している傾向があると指摘する。⁽²⁵⁾セリグの指摘は正しい。しかし、同時に、両者の相違点として挙げられるのは、ギッシングの作品は、敗北と欲求不満の中にも「希望」が見られるものが多いが、ブロックの場合は必ずしもそうではないということだ。たとえば、上述の「嘆く者たち」と「クリストファソン」を比べてみると、両者ともみすばらしい老夫婦の物語だが、ブロックの作品の老夫婦は、息子の死によってますます惨めさが強調されているのに対して、ギッシングの作品の老夫婦は、本を失うことにより敗北と欲求不満を味わうが、結末は、彼らの余生の穏やかな幸福を予感させる。

ギッシングの他の作品で、敗北と欲求不満を描いていながら、「希望」を感じさせるものに、代表的なものとしては、『蜘蛛の巣の家』の中の「ハンブルビー」、『環境の犠牲者』の中の「校長先生の夢」が挙げられる。⁽²⁶⁾ハンブルビーはこの上なく内気で口数の少ない少年だったが、チャドウィックという級友を溺死から救

う。会社を経営するチャドウィックの父親は、ハンブルビーに感謝して、自分の会社に雇う。しかし実務能力のないハンブルビーは解雇され、おまけに彼の父親は事業に失敗し、病死する。そこでハンブルビーは別の会社に移り、安い給料で働く。ある時、母親を訪ねての帰り途、乗っていた列車が事故に遭い、ハンブルビーは乗客の中でただひとり負傷する。彼を助けて病院に運んだのは、学校時代に溺死するところを彼から救われたチャドウィックだった。チャドウィックは、会社を経営しており、ハンブルビーに、今働いている会社の2倍の金を出すから、共同経営者にならないかと誘う。恋人ができ、彼女と結婚する予定のハンブルビーはその話に乗る。しかし、実はチャドウィックの会社は詐欺であることが発覚し、チャドウィックは逮捕され、ハンブルビーは職を失う。しかし、それでも、彼の恋人は、彼を捨てずに付いて行くことを決心する。

「校長先生の夢」の主人公であるダン校長は、退屈で単調な教職に欲求不満を覚えていた。彼は、ひとりの生徒の母親である未亡人に魅惑され、ある時、学校をひとり飛び出す。彼は宿屋で寝ている時、悪い夢を見る。夢の中で、例の未亡人が華美な服装に身を包んで自転車に乗り、彼は彼女を自転車で追うが、ぶざまに転ぶ。道端で、未亡人の息子が、彼女に向かって「お母さん」と叫ぶが、彼女は無視して、高らかに笑いながら走り去る。校長は悪夢から目が覚め、彼の学校に戻ると、現実でも同じようなことが起きていた。未亡人は見知らぬ男と結婚し、彼女の子供を親戚に預け、よその町に去っていた。校長は、まるで自分に言い聞かせるかのように、泣いている未亡人の子供に、「与えられた仕事はどんなに単調であっても、どんなに退屈であっても、感謝の気持ちを持ってそれを行いなさい。堅実で、実りのある労働ほど健全なものはないのだから。突拍子もない空想に弄ばれてはならない。常に落ち着いた理性に頼りなさい、常に」⁽²⁷⁾ と説くのだった。この結末には、誠実に義務を果たす人間が最終的には成功するはずだという、「希望」のメッセージが読み取れる。

ブロックは、「ギッシングを、この上なく陰鬱だが、それを自覚していないユーモア作家以外の何者かであると見なすのは、イーストエンドのスラム街に花が咲くと思うのと同じことだ」⁽²⁸⁾ と述べている。つまり、ギッシングのユーモアはこの上なく陰鬱であったと指摘している。果たしてそうであろうか。確かにギッシングの作品は、彼が自覚していたかどうかは別にして、すべてなんらかの陰鬱さを備えているが、暖かみ、同情、希望が感じられるものも多い。もし、ギッシングが、長編小説『暁の労働者』、『地獄の世界』、短編小説「静寂の午後」、「時計塔の明かり」のような陰鬱でペシミスティックな作品のみしか書けなかったとすれば、彼は、今日のような再評価と名声を得ることはなかったであろう。⁽²⁹⁾ それに対して、ブロックのユーモアは陰鬱で、登場人物の人生には希望がないものが多い。ジョン・ウィルソン・フォスターは、「ブロックの、彼自身の登場人物に対する共感の欠如は、その風変わりなユーモアにもかかわらず、彼の小説から暖かみと活気を奪っている」と述べている。⁽³⁰⁾ フォスターの指摘は正しい。ブロックは、その作品の陰鬱さゆえに、ギッシングほどの評価を得ることができなかったのかもしれない。しかし、同時にフォスターが「ブロックの小説は社会史としての価値がある」と評価している通り、19世紀末から20世紀初頭にかけての北アイルランドの姿を、プロテスタント、カトリックどちらに与することもなく、公正な視点から描いており、歴史的資料としての価値を有している。「新兵たち」、「国家公務員」、自伝風小説『60年後』などがその好例である。また、「国家公務員」、「海外移民」、「彼らふたり」、「嘆く者たち」などは、当時の北アイルランドの社会情勢を忠実に描くと同時に、悲哀に満ちた人間の生き様を描き、北アイルランドのみならず、人間世界一般に通じる普遍的価値を有していると言えよう。

(注)

- (1) John Wilson Foster, *The Titanic Complex* (Vancouver B.C: Belcouver, 1997), p.14.
- (2) "A Confusion of Strains", *Lost Fields*, a supplement to *Fortnight* 306, May, 1992, p.14.
- (3) "Introduction", Shan F.Bullock, *Thomas Andrews: Shipbuilder* (1912; rpt., Belfast: Blackstaff, 1999), xvii-xviii.
- (4) *Thomas Andrews: Shipbuilder*, p.50.
- (5) *Ibid.*, pp.36-37.
- (6) *Ibid.*, pp.68-74.
- (7) *The Titanic Complex*, p.89.
- (8) Robert L.Selig, "Gissing and Shan F.Bullock: The First Reference in the Chicago Press to Gissing's Chicago Fiction and Adventures", *The Gissing Journal*, Vol.XXVIII, No.4, Oct. 1992, pp.1-6.
— "The Critical Response to Gissing and Commentary about him in the *Chicago Evening Post* (1)", *The Gissing Journal*, Vol.XXX No.1, Jan. 1994, pp.26-37.
— "Ibid (2)", *The Gissing Journal*, Vol.XXX No.2, Apr. 1994.
- (9) 小池滋 「ギッシング選集によせて」 ジョージ・ギッシング／太田良子訳 『余計者の女たち』—ギッシング選集第三巻— (秀文インターナショナル、1988), ii-iii.
- (10) "The Critical Response to Gissing and Commentary about him in the *Chicago Evening Post* (2)", pp.15-16.(Shan F.Bullock, "Shan F.Bullock Estimates Art of Late George Gissing...", 16 January 1904, p.5)
- (11) Shan F.Bullock, *After Sixty Years* (London: Sampson Low, Marston, 1931), p.34.
- (12) *Ibid.*, p.25.
- (13) John Wilson Foster, "Bullock, Shan F. (1865-1935)", Robert Hogan, ed., *Dictionary of Irish Literature: Revised and Expanded Edition A-L* (Westport: Greenwood, 1996), p.198.
- (14) "The Awkward Squads", Shan F.Bullock, *The Awkward Squads and Other Stories* (London: Cassell, 1893), pp.119-120.
- (15) Shan F.Bullock, "A State Official", Seamus Deane.et.al.,eds, *The Field Day Anthology of Irish Writing*, Vol.I (1991; rpt., Derry: Field Day, 1992), pp.1066-1070.
- (16) *Ibid.*, p.1067.
- (17) *Ibid.*, p.1069.
- (18) Augustine Martin, "Shan F.Bullock (1865-1935)", *The Field Day Anthology of Irish Writing*, Vol.II, p.1066.
- (19) "A State Official", p.1067.
- (20) Shan F.Bullock, *Ring o' Rushes* (New York: Stone&Kimball, 1896)
George Gissing, *Human Odds and Ends: Stories and Sketches* (1893)
—*The House of Cobwebs* (1906)
—*A Victim of Circumstances and Other Stories* (1927)
- (21) "Gissing and Shan F.Bullock: The First Reference in the Chicago Press to Gissing's Chicago Fiction and Adventures", p.5.
- (22) "They Twain", *Ring o' Rushes*, pp.65-89.
- (23) *Ibid.*, p.88.
- (24) "They that Mourn", *Ring o' Rushes*, pp.31-45.
- (25) "Gissing and Shan F.Bullock: The First Reference in the Chicago Press to Gissing's Chicago Fiction and Adventures", p.5.
- (26) "Humblebee", *The House of Cobwebs* (1906; rpt., London: Constable, 1931), pp.68-87.
"The Schoolmaster's Vision", *A Victim of Circumstances and Other Stories*, pp.127-144.
- (27) "The Schoolmaster's Vision", p.144.
- (28) "The Critical response to Gissing and Commentary about him in the *Chicago Evening Post* (2)", p.15. ("Shan F. Bllcock Estimates Art of Late George Gissing...", 16 January 1904, p.5.)
- (29) "The Day of Silence" in *Human Odds and Ends*.
"The Light on the Tower" in *A Victim of Circumstances and Other Stories*.
- (30) John Wilson Foster, "Bullock, Shan F. (1865-1935)", *Dictionary of Irish Literature: Revised and Expanded Edition A-L*, p.198.

本稿は2002年度日本学術振興会科学研究費助成に基づく研究成果の一部である。